



# 都連青年部通信

部落解放同盟東京都連合会 青年部  
2018年 5月号

## 雇用相談のお知らせ

- ◆日時:4月18日 13:30  
(5/16、6/20、7/18)
- ※緊急の場合はいつでも対応します。労働に係る生活相談等お困りごとがありましたら気軽に相談ください！！
- ◆内容:国と都の専任の担当者が仕事探しの手伝いをします。

- ①就職や仕事探しのサポート
- ②職業訓練や非正規から正規へのキャリア・アップの相談
- ③失業・求職時の居住や生活費などの生活相談・支援
- ◆費用:無料
- ◆問い合わせは各支部へ！

## 4月 取り組み

- ◆4月22日(日)『都連青年部大会』/『第3回聞取り活動』 解放会館3階
- ◆4月24日(火)『きねがわFW with と場労組青年部』 東墨田会館
- ◆4月28日(日)『中央メーデー』 代々木公園
- ◆5月3日(木)『憲法集会』 防災公園

## 今後の予定

- ◆5月18日(金)18:00~『青年部学習交流会』 解放会館
- ◆5月20日(日)13:00~『都連大会』 台東区民会館8階
- ◆5月22日(火)18:30~『狭山事件の全証拠開示と再審を求める情宣行動』 上野駅
- ◆5月23日(水)13:00~『狭山事件の全証拠開示と再審を求める市民集会』 日比谷野音

## 狭山情宣行動

日時:5月22日(火) 18:30  
場所:上野駅広小路口  
「高裁は再審をおこなえ~」  
「高検は全証拠を開示しろ~」  
狭山完全勝利に向けて、みんなで  
石川さん無実をアピールしよう!

## 問い合わせ

〒111-0024  
台東区今戸 2-8-5 東京解放会館内  
Mail:moyu.k@blfokyo.net  
TEL 03-3874-7311  
担当:岸本

## — 2018年度 都連青年部大会 —

都連青年部は、2018年度青年部大会を4月20日、東京解放会館にて行ないました。青年部からの出席は8人、都連から近藤書記長が代表で出席をされました。近藤書記長は挨拶で、①「差別がない社会」に必要なのは「差別と闘っている社会」②社会の全ての場所で「反差別のルール」を浸透させ人権社会の確立、民主主義の本質である平等を実現させる③それを促進するには、ルール化が必要な為、差別禁止・人権侵害救済法などの法制度の確立を目指す④反差別共同闘争・当事者運動をしっかりと行ない「闘う主体の形成」をしていく。以上が、都連青年部が今後運動を進めていくうえで、求められると述べられました。

2017年度の活動報告は、全国の部落青年はじめ、労働組合青年部、被差別当事者団体、研究者、教師などと連帯した取り組み。また、青年部で定期的に行なった学習交流会などについて報告されました。

2018年度の活動方針では、格差と貧困が強まり、自国第一主義、排外主義的政治勢力が広がりを見せるなか、人権を巡っては、差別や人権侵犯事件の増加、悪質化の傾向にあることで、部落差別事件も深刻な状態が続いていることから、都連青年部は①反差別・人権交流会の活発化②都連青年部活動の周知と、全国の仲間とのつながり強化③部落青年の居場所づくり、狭山闘争、差別糾弾闘争、人権政策確立に向けて取り組む④組織拡大、「子ども会」活動の積極的展開、運動を継承していく自覚を高める⑤「戦争する国づくり」に反対し、「戦争法」反対、憲法改悪阻止、沖縄新基地建設反対、脱原発に取り組む。以上のことを方針にし活動していくことを確認しました。

2018年度は役員交代が行なわれ、部長1名、副部長2名、事務局長1名の新体制のもと運営していきます。新部長は挨拶で、部落完全解放をめざし、これまで都連青年部を守ってきてくれた先輩たちの意志を引き継ぎ頑張っていく。と決意を表明しました。



# ～世代から世代に～ 私が歩んできた道

## 第3回 聞き取り活動

都連青年部は第3回聞き取り活動を、東日本部落解放研究所、都都教と共同で、4月22日、東京解放会館で行ないました。聞き取りの目的は以下の3点。

- ①各支部で長年活躍された大先輩の運動の到達点を確認し、次世代が担うべき今後の運動の課題を考える
- ②次世代の為にも、先輩方の歩みを記録に残していく
- ③これからの運動を担う世代が聞き取り活動を通じ運動や交流の場を広げていく

第3回目の語り手は、品川支部で活躍されるとともに沖縄反基地運動にも取り組まれている\*\*\*\*さんにお話をしました。

\*\*\*\*さんは米軍統治時代に沖縄で生まれ育ちました。ご自身や家族が受けた、沖縄差別や米軍支配時の情勢について語っていただき、沖縄の歴史に触れることが出来ました。

また、\*\*\*\*さんは「運動の基本は部落も沖縄も怒りだ」と伝えてくれました。それは、ご自身の差別体験や、大学進学で琉球のパスポートを持って日本に渡ってから、文化のギャップに驚きながらも、学生運動、芝浦と場労組結成運動、組合活動、品川支部での活動などに取り組んでこられた経験からの言葉です。

「運動は一人からでも始められるし、地べたに足の着いた運動こそが解放運動で、素晴らしい」と青年部へメッセージも下さいました。その言葉を受け止め、青年部も諦めずに励んでいきたいです。



### ～私が育った米軍統治下時代の沖縄～

私は、米軍統治下の沖縄で1947年に生まれました。母は、4人の兄弟を女手ひとつで野菜の行商をしながら育ててくれました。数え年100歳で亡くなった母には、名前が2つあります。ソテツ地獄のとき、母は大阪の紡績工場に出稼ぎに行くのですが、差別を受けないように行政が母の生まれた時の名前＝マカテを日本風の「安子」に変えたのです。改正改名運動というのがあったのです。また、地域でも学校でも方言は使うな、標準語＝日本語を使うように「標準語励行」の標語がいたるところに貼られていました。自分たちの言葉は一段低いもので「標準語」はすばらしいと、ね。しかし、それでもみんな方言を使っていましたね。私の頃から、高校に行けるのが普通になってきたが、兄も姉も中学を出て働いていた。姉が米軍基地の道路工事で働いたとき、賃金にランクがあって、沖縄の人は日本人やフィリピン人よりランクが一番下だったと言っていました。



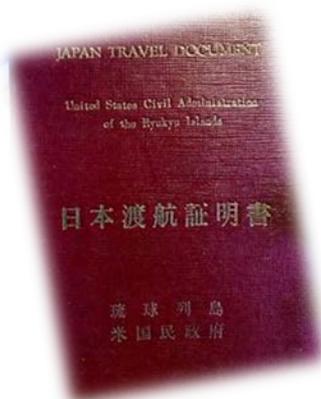
1972年5月15日沖縄が返還され道路標識などが一日で変わった

### ～パスポートをもって日本へ来てから～

高校卒業後に、琉球のパスポートを持って新潟の大学に留学しました。「人は左・車は右」の交通ルールを含め、お金にも驚きました。復帰前の沖縄はドルだったので、日本円はおもちゃのようでした。そして、まだまだ「朝鮮人・沖縄人お断り」の札が貼ってあるような、あからさまな差別が残っていました。

東京に出て来てから、連れ合いが全国一般の南部支部のオルグだったこともあり、芝浦と場労組結成、品川支部結成へと繋がっていきました。子どもを預けていた保育園で、解放同盟の支部の事務所ができることに反対して品川区職労が署名活動をしていて、その糾弾闘争をきっかけに支部女性部の共闘組織「部落解放をすすめ民主主義を守る会」が結成されました。現在も引き継がれており、沖縄のたたかいも共にしています。

私は、沖縄の事も部落の事も基本的には怒りだと思う。理不尽なことに対する怒り、いわれなき差別に対する怒りです。「差別」が自分の子どもに降りかかったとき、その重さ・深さが本当に自分に襲ってくる。そして、それは自分の娘とか孫について回っていく。許しがたい怒りです。一人でも多くの人に知ってもらい、仲間を広げていかないといけないと思う。



## ～皮から革へ～ きねがわフィールドワーク

w i t h 芝浦と場労組青年部



芝浦と場労組青年部が企画した、きねがわの歴史や皮革産業を学ぶ、きねがわフィールドワークに都連青年部からも3人が参加し、学習と交流を深めてきました。都連青年部では、と場の見学にも参加していたので、そこで働く青年との交流は念願でしたし、フィールドワークでの、視点の違いが勉強になり刺激を受けました。

今回、見学した「産業・教育資料館きねがわ」、と場にある「お肉の情報館」は、部落産業を学べる貴重な場所です。「無知が差別を引き起こす」ことから教育が重要であり、全ての学校での人権教育の実施、そのためにも、連帯していくことが大切だと確認されました。

と場労組青年から、「自分たちが解体した豚の皮が革になる行程が知れて良かった。」「差別の共通点や発見があり勉強になった。」「差別は外に出ると感じる。自分たちで差別をなくしていきたい」の意見がでました。

## ～関東大震災時 韓国・朝鮮人殉難者追悼の碑～

1923年9月1日に起きた関東大震災は死者数が91,344人という未曾有の災害でした。その混乱のなか、流言飛語により6,000人とも10,000人ともいわれる韓国・朝鮮人が、軍隊や警察、そして民衆の手によって虐殺されました。虐殺は、旧四ツ木橋付近でも行なわれ、荒川放水路工事で働いていた、韓国・朝鮮人の方々が犠牲になりました。けれど、事実は隠蔽され、犠牲者の名前も人数も明らかにされていません。

一人の教師の呼びかけで1982年から河川敷での追悼式がはじまり、2009年に「歴史を心に刻み、犠牲者を追悼し、人権の回復と両民族の和解」を願って追悼碑が建立されました。碑の横には、「ほうせんか」の建物がああり、毎週木曜日にお話を聞くことができます。当時を生き残った人から話を聞くのは困難ですが、被害と想いを受け継いでの方から、現場で話を聞くのは、貴重な体験です。現在行なわれているヘイトスピーチは、また大虐殺が繰り返されるかも、という恐怖を蘇らせます。私たちはヘイトスピーチを許さず、大虐殺の事実を受け継ぎ、語り継ぐ責任があります。



## ～産業・教育資料室きねがわ～

資料室は、木下川小学校が廃校になった翌年(2004年)に旧校舎1階を利用し開かれ、現在は東墨田会館へ移り、年間約3000人の人が、社会科見学などで訪れています。展示室には昔使用されていた道具や、木下川地域の皮革関係業者が制作した「未来の皮革」をテーマにした皮革作品が並び、皮革関係の昔、今、未来のものが展示されています。

## ～皮革のまち・きねがわ～

浅草から木下川へ強制移転させられた1892年から木下川の皮革業の歴史は始まります。

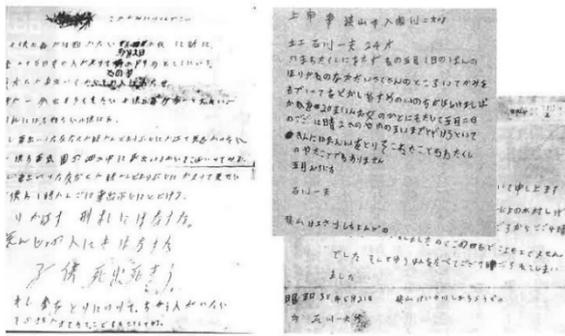
住民たちは、周囲に川が流れる湿地帯だった場所に盛土などをし、町を作り上げ、2度目の強制移転命令は運動により撤回させました。最盛期には皮革関連工場が100軒以上ありましたが、現在は純粋な鞣し工場は10数軒に減ってしまっています。しかし、現在も豚革の生産のうち9割以上が木下川で鞣されています。

古代から続く鞣しの技術は、先人らの努力もあり進化を続けました。けれど現在も、原皮から製品に至るまでは多くの工程があり、大変な作業です。1つの処理ごとに数百枚の水を含んだ皮(約10キロ)を1枚ずつ出し入れしたりします。良い製品にするには、それぞれ違う、皮の状態を見極め、薬剤の調整や湿度温度管理をし、厚さの揃った品質にする、熟練の技が必要です。木下川は、工程ごとの工場が、集まり「1つの工場」として、世界に誇る「木下川ブランドのピッグスキン」を作り出しています。そして今も、この技術を後世に伝えるべく、日々発展の努力を続けています。



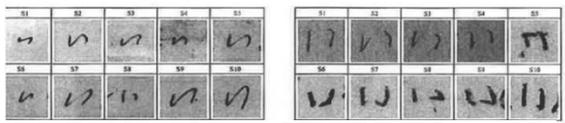
# 脅迫状は99.9%別人が書いたもの！！ コンピュータによる筆跡鑑定～福江報告書～

今年、1月15日に提出された、福江潔也・東海大学教授による「脅迫状と上申書間におけるコンピュータによる筆者異同識別」など報告書2通は、狭山事件で犯人が届けた脅迫状と、石川さんが書いた上申書(1963年5月21日付け)および石川さんが浦和拘置所にいたときに書いた自筆の手紙2通(1963年9月および10月に書かれたもの)を検査対象として、コンピュータによる筆者異同識別を行なったもので、脅迫状と上申書・手紙は「平均識別精度99.9%であきらかに別人により筆記されたものである」と結論付けています。つまり、脅迫状を書いたのは石川さんではなく、全くの別人ということです。



福江報告書の判定方法は、脅迫状と上申書・手紙にくりかえし出てくる「い、た、て、と」の4文字を対象として、「マッチング残差(文字のズレ)」を計測し、比較することで、同一人の筆跡かどうかを統計的に比較するというものです。

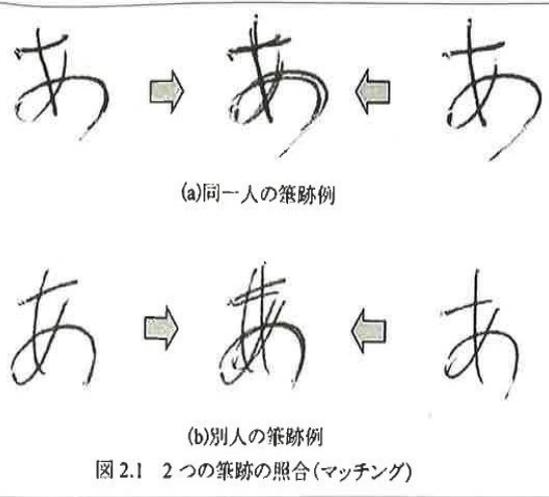
なぜこの4文字なのかということ、上申書・手紙にくりかえし出てくるという理由もありますが、漢字よりも平仮名の方が何回書いても「書きムラ」が出にくいという点があり、さらに、福江教授の研究室は、同一人が多数回「い、た、て、と」の文字を書いた際のズレについて、統計的な資料を有していることから、「い、た、て、と」の4文字を対象としています。



福江報告書のポイントとしては、「すべての処理がコンピュータで行なわれることにより、科学的意味合いが強くなり、鑑定人の主観が入る余地がない」という点です。

このことから、福江報告書は人が観察し、判定していた従来の筆跡鑑定と違い、客観性の強い鑑定方法なのです。有罪の決め手となった脅迫状を石川さんが書いていないことが福江報告書によって科学的に証明されたことにより、脅迫状と上申書が同一人の筆跡であるという確定有罪判決の認定に合理的疑いが生じていることは明らかです。

東京高裁第4刑事部・後藤眞理子裁判長への要請ハガキ運動をはじめとした様々な行動に取り組み、なんとしても再審開始決定と石川さんの無罪を勝ち取ろう！！



## 狭山事件の再審を実現しよう 第36次 高裁前アピール

高裁前アピール行動が始まって何年になるだろう。

206年5月23日、第3次再審闘争が始まった。2009年9月から三者協議が始まり、前段に高裁前アピール行動を続けて今回で36次になる。当初、三者協議は、1年に2回ほどだったので、アピール行動も7~8回ほどあったが、三者協議が2~3カ月に一度くらいの開催になり、前段のアピール行動も3~4回になった。当初7~8人の動員で始まったアピール行動。今は常時述べ60人から100人。解放同盟、労働組合、労働組合OB、OG、宗教者、市民の会、住民の会、障がい者解放運動をされている方、「狭山勝手連」と、いつか市民運動の様相になっていた。それぞれの皆さんの手作りのボード、横断幕、「鴨居」ハッピー、高裁前は何時もにぎやかだ。

早智子さんのHPより



雨の日も、風の日も、雪の日も、暑い夏の日も、石川さんは、無実を訴えマイクを握り続けました。その姿に、多くの人が心震わし、そして支援の輪は広がり続けています！

後藤裁判長聞こえますか？